社会の真実の見つけかた

堤　未果著

岩波ジュニア新書 673

目　次

第1章　戦争の作りかた——三つの簡単なステップ……1

恐怖が判断力を失わせる／現れた敵／「戦争がはじまるぞ」／人はイメージと思いこみで動かされる／戦争を作り出す三つのステップ／本当に大事な情報が見せてもらえなくなる／メディアをうのみにしている間に法律が変えられる／戦争にお金が使われれば、学生より兵士が増えていく／「きみには、夢をかなえる価値がある」／貧しい子どもは軍へ、中流の子どもは借金づけに

第2章　教育がビジネスになる……55

奇妙な出来事／全米に広がる教師のインチキ合戦／教師と公教育バッシングになった教育改革／落ちこぼれゼロ法で肥満児が

増える／なぜ教師の二人に一人が五年以内に辞めるのか？／障害を持つ生徒にも同じノルマ／孤立する教師たち／ベビーシッターより安い時給／教師だってほめられたい／オバマの Race to the Top（全米予算獲得レース）／七年でかけ金が二倍になる投資「チャータースクール」／二一世紀の新しいベンチャー型チャリティ／公教育は悪、チャータースクールは善／そして日本の教育現場は？

第3章　メディアがみせるイメージはウソ？　ホント？……121

テレビは信用できない／マスコミは出演者とお金の流れを見る／一行ニュースの落とし穴／世界が恐れる謎のハッカー集団／世界中のニュース報道を比べてみる／ニュース監視ＮＧＯを利用する／大手メディアとインターネット―どちらが信用度が高い？／当事者の声を聞くともうひとつの世界が見える／ウィキリークスつぶしが示すもの／スキャンダル報道の裏にある重要ニュース／国会のホームページを見ると新聞・テレビのからく

りが見える／大手メディアとローカルメディアを比べてみる

第4章　社会は変えられる……177

「人生で一番ワクワクしたオバマ選挙」／社会を変える高齢者たち／「しあわせになりたきゃ選挙に行け」／「選挙と選挙の間こそ本番なのよ」／若者が政治から目を離しているすきに／「最高の投資商品があるんです、若者の教育ですよ」／「ネットがある時代に生まれて本当に良かった」／いろいろな意見を聞いて結論を出す／ライブ（対面）の力／自由にモノが言える場を守る／教育現場から社会を変える／英語は最強の武器になる／誰でも真実を見つける力を持っている

あとがき　225

本文イラスト＝山本重也

＊本文中の肩書きは、基本的に取材当時のものである。なお、仮名を用いたケースがある。

＊為替相場は、取材時に一番近い一ドル＝一〇〇円に統一した。

第1章

戦争の作りかた

――三つの簡単なステップ――

恐怖が判断力を失わせる

ナイト・シャマラン監督の『ヴィレッジ』（二〇〇四年、アメリカ）という映画を見たことがあるだろうか。

主人公の盲目の少女アイビーが暮らす村は、深い森に囲まれ、村人たちが家族のような深い絆で結ばれながら平和に暮らしている。村には「森に入ってはならない」という古くから伝わる掟（おきて）があり、そこに住むモンスターを恐れる村人たちはこの言い伝えを忠実に守って暮らしていた。

やがて物語がすすみ、アイビーはたった一人でモンスターが住む森を通り抜けなければならなくなる。そしてそこから、村を取り囲む恐怖の森の正体が明らかにされてゆく。

「モンスター」は実は、村人によって作り上げられたまやかしだった。外敵に怯（おび）える村人たちは、決して真実を見ないよう巧妙にコントロールされていたのだ。

本当に必要な情報から遮断された彼らは、実態のない「敵」に対する恐怖に支配され、判断力を失い、何も考えず「掟」にしたがってさえいれば安全だと信じこんでいた。だがそれ

はゆがんだ力が作り出した、幻想の「平和」だったのだ。

この手法は人間の歴史のなか、繰り返し使われてきた最もオーソドックスなものだろう。国籍や宗教、肌の色にかかわらず、うまく適用すれば絶大な効果を上げられる。

なぜなら恐怖は、あらゆる人々の内側に潜んでいるからだ。普段はその存在に気づかなくても、ふとした時に何かのきっかけで姿を現し牙をむく。

怯えて逃げようとすればするほど巨大化するこのモンスターに勝つ方法はただひとつ、目をしっかりと開きその正体を見ることだ。

『ヴィレッジ』の中の村人たちのように、目をつぶり耳をふさげば決して勝てないだろう。だがひとたびその実態を知れば、霧が晴れるように世界は別の姿を現してくる。

*

二〇〇一年のニューヨーク。レイモンド・コックスにとっての「掟」は、他の多くのアメリカ人にとってそうだったように、星条旗と共にやってきた。きっかけは九月一一日に起きた「同時多発テロ」。旅客機をハイジャックして世界貿易センタービルに突っこみ、数千人のいのちを奪ったのは「テロリスト」という名の新しい敵だ。

黒い煙を上げるツインタワーとターバンを巻いた犯人たちの映像が全米に流れ、凶悪な敵

から身を守るただひとつの方法が繰り返し伝えられた。

「相手は理屈など通じない悪魔だ、やられる前にこちらから攻撃するしかない」

大統領がテレビの中からそう言って団結をよびかける。

アメリカに新しい「掟」が生まれた瞬間だった。

たちまち街じゅうに星条旗がかかげられ、国歌が流れ、この戦いに勝利することがそれ以外のあらゆるものにとってかわった。邪悪な敵が銃口をこちらに向けているときに、教育や医療、病人や障害者や女性やゲイやホームレスの権利にかまけている暇がどこにある？

この戦いに加わろうと軍に入隊し、戦地に送られていった数え切れないほどの若者たち、当時高校生だったレイモンドもその一人だった。

ゆるくカールのかかった金髪と引き締まったアゴ。メガネの奥の茶色の瞳がきょろきょろと不安そうに動き、話しながら両手の指を神経質そうに組みかえるくせのある二五歳の青年だ。

「もし、９・11がなかったら、僕は入隊しなかったでしょう。テロリストが憎んでいるものがアメリカの〝自由〟だと聞いて、ケネディ大統領の言葉を思い出したんです」

当時高校生だったレイモンドは、自分の机の前の壁に、尊敬する第三五代アメリカ大統領

ジョン・F・ケネディ（一九一七-六三）の言葉を貼っていた。

「私の仲間である世界の市民の皆さん、どうかアメリカがあなたがたのために何をするのかを聞かないで下さい。代わりにこう考えて下さい。人間にとっての自由、そのために私たちが一緒にできることは何かを」

アメリカ人にとって、他の何よりも今なお心を揺さぶられる自由という言葉。

高校生のレイモンドにとってもそうだったのか。

「あなたにとって、自由とは、何ですか？」

私が、インタビューの中でたずねるとレイモンドは、しばらく考えてからこう言った。

「自分の人生を自分で決められること…かな。でも改めて聞かれるとはっきりしません。いま振り返ると、八年前に守ろうとしたものさえ正直言ってわからない」

「〝対テロ戦争〟の目的は、アメリカの自由と民主主義を奪うテロリストから国民を守ることでしたね」

「そう、自分もその時はそう信じていました。でも…」と、レイモンドは胸が痛むのか、片手で強くおさえながら言った。

「八年という長い月日が経ったいま、あの時のことをふり返ると、ふとこんなふうに思う

んです。自由を奪う敵がくる、そう言われたからいのちがけで守ろうとした。でもそれによって僕らは、何か大きなものを失っていったんじゃないかって。奪われたものは、本当はもっと別なものだったんじゃないかって」